

第3回屋内スケート施設あり方検討会議の概要について

1 日 時：令和4年12月27日（火）14時から16時まで（2時間）

2 参加者：構成員6名 ※佐藤 高体連会長が欠席（御意見は動画で紹介）

3 会議概要

（1）事務局からの説明

- ・ 各委員から要望があった項目（若者・女性等の意見、本県の人口減少や財政の状況及び他県の屋内スケート施設の概要一覧等）について説明

（2）これまでのアドバイザーや競技団体からの説明等を踏まえた主な御意見（構成員名簿順）

① 効果と課題について

【井上 圭子 氏】

- ・ 現在あるスケートリンクは周りに手すりがないので、小さな子どもさんたち、女性の方たちが少し使いにくい施設になっている。スロープがある場所もあるが、段差や施設の表示などがわかりにくく、障がい者や弱者の方にあまり優しくない施設になっている。大人から子どもまで、障がい者の人たちも使いやすいような施設が望ましい。
- ・ スポーツをする方たちが、コロナなどからも減っているというデータがあったが、その中でも女性のスポーツの実施率が低いというデータもある。フィギュアスケートは圧倒的に女性が多いスポーツであり、施設ができれば女性の方たちがもっと身近にスポーツと触れ合え、高齢者の健康増進にも一役買えるのではないかと。
- ・ また、屋内のスケートリンクであれば、親の目の届く範囲で子どもたちが遊べるので、安心して子ども達に体を動かしてもらえる。
- ・ 課題については、利用者の確保が考えられるが、前回の競技団体からの御説明では、スピードスケート、アイスホッケー、カーリングそれぞれの専門の施設を造ってほしいというお話であった。それが一番理想ではあると思うが、利用者の確保、持続して運営をしていくことを考えると、専門的な施設は難しいのではないかと。
- ・ 人口も減っていく中で利用者を確保するためには、他のスポーツも使えるよう多目的で、多くの方に使っていただけるような施設にする必要があるのではないかと。

【加藤 文子 氏】

- ・ 効果に関しては、第一にアイススポーツの競技力向上に寄与することは当然に考えられ、加えて、県民にとっても多様なスポーツを実施できる機会が増加することが期待でき、県民生活の文化的な豊かさの向上につながっていくと思う。
- ・ 経済効果については、整備、運営の手法、利用方法によって違いが出てくる。整備、運営に関しては、地元の調達がどのくらいできるのかが重要。建設だけではなく、運営や保守について、県内の事業者等で賄うことができるようになれば、地域経済への波及が増えることになる。スポーツ施設の運営を担う事業者の育成、人材の育成を長期的な観点から実施していけば、可能になるのではないかと考える。
- ・ 当然、多くの方に利用してもらうことが経済効果的にも重要になり、競技者、一般

の方の利用だけではなく、様々なイベント等にも活用できれば集客による経済効果も生まれることになると思うが、経済効果については「あり方」次第のところが多い。

- ・ 課題に関しては、整備、運営についてある程度の公費負担が発生することが仕方ないが、恒常的に大幅な赤字が出続ければ、持続可能な運営ができなくなり、次の世代に問題を先送りしてしまう。
- ・ 県民に愛される施設となるためには、納得性の高い、効率的な整備、運営を行うことや、適切な稼働率を維持するための使い勝手の良さなども課題になると考える。

【佐藤 裕恒 氏】

- ・ 毎年小学5年生と中学2年生男女を対象に全国運動能力・体力調査が行われているが、体格に係る全国調査では男女とも体格が良く肥満傾向が高い状況にある。肥満傾向については北日本、東北に同傾向がみられ、冬場の運動量が少なくなることが要因であるとも考えられている。
- ・ スポーツ庁では、授業以外での運動の機会が減少している・スクリーンタイムの増加による運動離れ・肥満傾向が強くなっている、この3点を大きな課題と捉え対策を講じている。
- ・ 特に本県においては少年期の肥満はその後の人生にも係る重要な課題であり、冬季間にスクリーンタイムを減らして運動機会を増やす取組みは大切なことである。全身運動であり基本的な運動能力を高める効果のあるスケートは、健康な心身の保持増進を図るうえで大切なスポーツである。
- ・ スケートを楽しむことは「バランス感覚が養われる」「体幹の力が向上し姿勢が良くなる」「持久力が付く」「ダイエット効果がある」など、体力・運動能力・神経系の働きをよくする効果がある。そして何よりも手軽に運動不足解消とスケートリンクで滑ることで開放感がプラスされストレスやイライラなど心の疲れも癒してくれる。
- ・ ゴールデンエイジ（9歳～12歳頃の運動能力が急速に発達する時期）は一生のうちで最も運動技術を身に付けるのに適している時期で、短期間で習得できることが科学的に証明されており、この時期のスポーツ経験の在り方はその後のスポーツに対する考え方にも影響する。
- ・ 「スポーツが好き」「親子で楽しめる」「手軽に楽しめる」「基本的な運動能力を高めるのに適している」などの要素を満たすことができるスケートは、ゴールデンエイジにとって経験させたい競技である。スポーツ庁は1つの種目を専門的に行うのではなく、シーズン制で様々な種目に取り組むことも大切であると見解を示している。まさに冬場の競技スポーツとしてのスケートは、夏場の競技に生かす視点でも運動能力を伸ばすことにもつながる。
- ・ 施設ができれば人が集まるという考えではなく、競技団体やイベント企画会社などとも連携して人が集まるための具体的な方策を明確にしておく必要がある。特に競技団体が普及・強化についてどのように考えているかが、施設運営にも影響すると思われることから、競技団体の屋内スケート場活用のビジョンを明確にすることが大切と考える。
- ・ 今後は競技団体が中心となりこれからの普及・強化について、県スポーツ協会や関係団体に具体案を説明し、県をあげて施設の利活用と競技の普及・強化について知恵

を出し合い、持続可能な施設の在り方についてビジョンを共有する必要がある。

【須藤 勇司 氏】

- ・ スポーツ庁の調査結果によれば、小中学生の男女とも体力運動能力が年々低下してきており、この調査方式になった2008年度以降最低になったとのことであった。また逆に、その調査では肥満の割合が増加傾向にあるとのことでもあった。
- ・ 特に山形の場合、雪が積もる積雪期の冬場になると、子どもだけでなく大人もスポーツ活動が限定的になっており、スケートリンクが新たに整備をされることになれば、スポーツによる楽しみの選択肢が広がり、体力運動能力の向上だけでなく、健康の維持にも大きく効果が期待される。
- ・ 特に子どもさんや若い世代の人たちにとっては、冬場も楽しめる施設ができると、雪の季節があるこの県内で楽しく暮らせるという意味では、地域の魅力の一つになっていき、Iターン、Uターンなど、人口動態では転入になることへの効果や、県内に住んでいらっしゃる方が住み続けるという意味で、定住者の増加といったことにも大きく寄与するのではないかと期待をしている。効果を定量的にお示しすることは難しいが、心の中の効果が非常に大きいと思う。
- ・ 課題とすれば、いかに実際の活動にしていけるか、心で思っただけでもなかなか活動に繋がらなければ施設が利用されないことになる。施設の整備費の他、維持管理費を含めてどう負担していくのか、そういった費用をできるだけ抑えていく、それでも必要とされる費用をどう賄うかということが一つの課題ではないか。
- ・ 整備する施設は、特に多くの方に利用されるということが前提となるが、利用する方の負担があまりに大きいものになっても、なかなか利用が進まないのも、利用者の数をいかに確保するかが必要と考えている。
- ・ スケート以外での活用も含めて、どういった機能の施設にするのか、費用を抑えるといった視点から、通年のリンクがいいのか、夏場は氷を張らない形で別途の施設利用を考えるとといったところも大きなポイントではないか。
- ・ 若者の意見にもあったが、いかに多くの県民にこの施設整備の利益が及ぶかといったところも大きなポイントであり、将来の子どもたち、若者が利用しやすい施設を目指すことが地域の魅力、山形での魅力ある施設になると思う。
- ・ 競技力の向上にも直結することは間違いないと思う。

【藤木 秀明 氏】

- ・ 新規事業で、しかも大型事業になる可能性がかなり高いので、どうやって進めていくかは、しっかり練らなければならず、官民連携が一つのポイントと考える。
- ・ 官民連携で、特に期待されるのが民間の創意工夫だが、使われる施設としていくためのマーケティングを機能的に行っていくこともあるが、従来型の行政のように、企画、建設、維持管理といったことよりも効率的にできる、あるいは民間の市場性を前提に民間にも一部負担いただくということも考えられる。
- ・ 整備運営費用を抑えようとするため、官民連携に期待する前提として、市場性が重要な要素になる。一言でいえば、儲かるかどうか。
- ・ どう使うかという議論と、どこに造るかという議論、行政として負担しうる金額の議論、その中で民間に何を期待できるか、かなり多様な点を同時に解ける官民連携

の均衡点を探っていく作業が今後必要になってくる。

- ・ 近年、特に社会的インパクト投資やインパクトを測定した民間委託、内閣府で成果連動型民間委託と呼んでいる分野になるが、コロナ禍になって体を動かす機会が減っており、そういった促進を含めたインパクトといったものを活用して、整備にあたって目標を立て、それを達成するために行政と民間事業者が何をターゲットにして一緒に頑張るのかということを経験し、その達成度合いで委託料を払うといったやり方を静岡県島田市などで試行しているケースもある。

【山川 唯美 氏】

- ・ 新しく屋内スケート施設ができれば、遊びやスポーツ、趣味の選択肢が広がるということは考えられ、また、イベントができるような多目的な施設があれば、県外から交流人口が増えて、地域活性化にもつながるのではないかと感じる。
- ・ 今の時期の山形のように寒くなると、私自身はスケートをやりたいと思うが、それは、小さい時や大人になってから体験したことがあることが重要とされており、私自身も今子育て中だが、子どもたちに今のうちからスケートを体験させることが、後々必要性というところにもつながってくると思う。
- ・ 課題については、誰が運営するのか、民間なのか、行政なのか、また連携するののかによって、やれることや県民がどの程度関わるかが変わってくると思う。それぞれにメリット、デメリットがあり、FLAT HACHINOHEのようなアグレッシブな運営を見てみると、民間の運営の方が様々なチャレンジができるのではないかと感じている。
- ・ 整備によって目指すところとして、テーマ、目的、目標が見え、県民が自分たちの主体性を持って利用できればいいと思う。ただ施設を造ったということだけでは、自分がその対象になるのかも不透明になってしまう。
- ・ 事務局のヒアリングの対象に、私たちの所属している団体の仲間も意見をさせていただいている。例えば、「スポーツに対する認識」について、うちの子どももそうだが、なかなか外で遊ぶ、体を動かすということが少ない中で、スマホやインターネットに触れている時間が長いと感じている。今の子ども達は余裕がないような毎日を送っているのかなと感じており、遊びという部分で、スポーツ、スケートに触れる時間が少ないのではないかと感じる。
- ・ また、「山形に対するイメージ」で、私も山形出身で、今、山形から離れていると言われる世代に入っているかもしれないが、山形は何もない、つまらないという意見も周りから聞こえてくる。やはりエンターテインメント性を持たせた施設があると、山形は楽しい、面白いにつながるのではないかと感じる。

【山田 浩久 会長】

- ・ 山形県に限らず潤沢にお金が回っている都道府県を探す方が難しい。近年は地域運営や自治体であっても効率的な運営を考えなければいけない中で、そもそも行政サービスとは何かということを経験した場合に、住民の方の幸せを上げていかなければいけない。人が減ってもその部分は確保されなければいけないと思う。
- ・ 運営のコストは大きな課題ではあるが、まずは県民全体が幸せになること、つまらない山形をつくるためにはどうすればいいか。そもそも効果を定量化することは難しいという意見もあったが、まさに行政サービスはそういったものだと思う。大人

や子どもや社会的弱者の方にも、ユニバーサルな施設として提案していくという御意見もあった。

- ・ 建設、運営費用など様々な経済的な負荷はかかるが、こういった施設が山形になれば、山形の魅力が生まれず、雪国であるのにウィンタースポーツをするチャンスがない、しにくい状況ではなかなか山形の魅力を発揮しにくい。
- ・ 本当に儲かる事業であれば、既に民間事業者が参入してスケート施設を造っているはずなので、それでも県で造らなければいけない理由は、利益度外視まではいかないにしても、行政サービスとして県がやらなければ誰もやらない、誰かがやらないと山形の魅力や県民の幸せが上がってこないという事業だと思う。
- ・ 効果としては、県民全員が冬の山形でウィンタースポーツを楽しめるような効果が確実に生まれてくる。さらに県内の事業所や指導者が育成されるであろうとの御意見もあり、これは、官民連携の中で検討していくことで、県内の市町村のお手本になるということでもあると思う。
- ・ この検討会議では、行政サービスとしてスポーツ施設を造るということの意義を強く主張していけるのではないか。また、競技団体の組織強化も課題であるという御意見もあり、とても重要なことだと感じた。

② あり方について

【井上 圭子 氏】

- ・ あり方としては、誰にでも優しい施設が必要と考える。
- ・ 障がい者のご家族からのお話では、今山形にある施設では、ほとんどの更衣室が男性と女性に分かれていて、多目的のトイレがあっても着替える場所がない。障がい者の子どもは着替えを手伝ってあげなければならず、子どもさんであれば、女性の更衣室に連れていけるが、障がい者の子どもたちは大人になっても手助けが必要な方たちもいるので、ご家族からすると、男女が一緒に入ることができる更衣室や多目的なスペースあれば便利とも聞いている。
- ・ 東京のお台場に、パラアリーナという障がい者のパラリンピックの選手が練習するアリーナがあるが、いろいろな方たちから意見を聞いて造られたとのことであり、山形でも造ることになれば、いろいろな立場の方たちからアイデアや意見を聞いていただいて、みんなで使いやすい施設にしてもらいたい。
- ・ 障がいがある子の場合、こういった施設がご家族の送迎がないと通えない場所にあると、なかなか自立できないことがある。山形は車社会なので、駐車場スペースは絶対的に必要であると思うが、できれば公共的交通機関も使いやすい場所を検討いただき、障がい者だけでなく、小さい子どもさんも、親から離れて自立することの第一歩にも繋がればよいと思う。
- ・ 小さい子どもさんから大人、弱者の人たち皆さんが楽しめる場所、そして行き来のしやすい場所ということがあり方としては大事なのではないかな。

【加藤 文子 氏】

- ・ アイスリンクを造るからには、多くの方に使っていただかなければいけないので、そのためには、飛び抜けて一つの機能に特化させるというあり方もあるとは思うが、

県内の人口から利用には限りがあるので、利用者のボリュームを一つの機能で確保することは難しいと思う。アイススポーツを中心としながらも、幅広い機能を持つ施設とすることで、多くの方が利用できる、利用者を確保することができることが望ましい方向性とする。

- 夏場のアイスリンクの維持が集客面でも難しいということを感じているので、夏場は別のアクティビティができる造りにして、機能の多様化を図ることで効率的な運営につながっていくと考えている。
- 経済効果について、施設自体の利用者がどれぐらいいるか、施設の集客がどれくらいあるかということが問題になってくるが、あり方を考えるときにアイスリンクに来る事に付随して発生する周辺店舗への立寄りなどの経済効果も副次的なものとして出てくると思う。新しいアイスリンク施設ができることによって、新たな人の流れが生まれ、周辺店舗等との経済的な相乗効果が図られ、それをまちづくりに活かすようなあり方もあると思っている。
- 県民にとって多様なスポーツが実施できる機会が増加することが、今回の施設整備のメリットとして大きいわけだが、県民の方がきちんと享受できるようにするためには、老若男女がアクセスしやすい、そして使い勝手が良いという施設であることが重要である。
- 利用者の確保について、県内の競技団体は、今は宮城、福島、岩手のアイスリンクを使っているとのことなので、近隣県のアイスリンクと連携を図るということで、近隣県の競技者の利用を逆に県内に促すということも可能になってくると思う。県をまたいで相互利用ができる予約システムなどを近隣県と連携して作ってあげればよい。

【佐藤 裕恒 氏】

- 他競技でも様々な施設要求がある中で、なぜスケート施設が必要なのかについてはその根拠を明確に説明する必要がある。検討会においてスケート場の必要性を明確にすることは大切な役割であると認識しているが、各競技団体が競技力向上に努力している中、県あげてスケート文化の創造に取り組むのか、と問われる大きな事業となることから、各競技団体への説明や県民への説明は丁寧に進める必要があると考える。
- スケート関係者、スケート連盟・アイスホッケー連盟・カーリング協会には特に今後のビジョンが見える積極的な取組みを期待したい。

【須藤 勇司 氏】

- 施設を造るからにはいかに利用されるかということが重要であり、一年中使える施設が望ましい。スケートなどの氷のリンクを前提として、年間通じての利用を考えたときに、維持費と利用者との兼ね合いから、必ずしも季節によっては氷を張らない方が、経費的には抑えられ、施設的にも氷を張らない運営も考えるべきではないかと思う。これまでいろいろお話を聞くと、夏場を中心に利用者の確保に御苦労があるということで、必ずしも通年リンクでやるということだけではなく、これから様々な前提をおいて試算が必要になると思うが、検討の選択肢としては二つあり得るだろうと思う。
- 具体的には、例えば、最近の若い方に人気のスケートボードやボルダリング、クライミングといったスポーツができるようであれば、若い人たちの集い、あるいは賑わ

いの場の提供にもなるかと思う。若い世代の方が楽しめる場になれば、地域での暮らしの魅力になってくる。

- ・ 中学校部活動の地域移行の話も出ており、スケートももちろん必要と思うが、それ以外にもたくさんスポーツができる施設であれば、スポーツ少年団やスポーツクラブなどの活動の幅も広がり、子ども達が様々なスポーツができるようになるといった面でも、季節によって違った機能があるということはスポーツに親しむ機会の拡大という意味ではいいのではないかと思う。できるだけ整備費、維持費も大きな額にならない範囲でと思うので、併設するものによってかえって費用が膨らむことのないものを検討すべきだと思う。
- ・ 活用について、学校の体育の時間を一部振り向けたり、地域の子ども会やスポーツ少年団での利用を促していくことが必要であると思うし、スケート関係あるいはカーリングといった競技団体の方で、自分たちの練習や教室の開催だけではなく、小学校、中学校、高校生を通じたクラブの創設といったところまで踏み込んだ取組みも必要だと思う。
- ・ 加えて、スポーツ関係のイベントはもちろんだが、それ以外のイベントのようなものが開催されると、運営面でも収支の面でも、地域にとっての賑わいづくりにもつながるので、そういった工夫もできる主体が運営に携わっていくことが望ましいと思う。
- ・ カーリング協会からも要望があったわけなので、カーリングをどうするかもポイントであると思っている。冬季オリンピックの度に女子のカーリング熱が上がるそうだが、女子のスポーツへのアクセスとして、冬季スポーツとしてはポイントになる可能性がある。

【藤木 秀明 氏】

- ・ 多面的に使えるという意味では、冬のスポーツでは屋内スポーツは他にあるので、転換できるような施設ができれば良いのではないか。
- ・ 運営の受託者にスポーツの振興や発掘を広げていただくような企画をしていただき、単に運営を任せるというよりは、多面的に指定管理者の方に裁量を与えて県民にアプローチいただく、知恵を引き出すといったやり方を、具体的な姿という意味では考えた方がよいのではないか。
- ・ この施設ができるまでの間に、どれだけスケート人口を増やすかということも、検討ポイントと考えている。例えば、街中に小さなスケートリンクを造ってみるといった環境整備も必要ではないかと思う。多額の費用が掛かるものができあがったときに、使う人がいない状況では厳しいので、仮にうまくいかなかったとしても被害がそれほど出ないように、社会実験的に小さな街中リンクを仮設で造ってみて、本当にスケートをやる人が出てくるのかどうか、その様子を見ながら具体的な施設のあり方を膨らませていくことも一つの計画策定の方向論としてあるのではないかと考えている。

【山川 唯美 氏】

- ・ 様々な可能性が広がるような、ワクワクする施設が必要なのではないかと思う。FLAT HACHINOHEのようなエンターテイメント性がある施設などが良いのではないかと

思う。

- おそらく、山形県民の方でよほどのファンの方でない限りはスケート関連のイベント、大会を見る習慣がないので、そういう人たちが気軽に行けるような施設が良いのではないか。
- 場所は、山形県民のほとんどの方は、大人の方車一人一台のようなかたちで動いていると思うので、駐車場が確保できるような、車で移動ができるような場所が良いのではないか。高速道路の入り口の付近などであれば、公共交通機関を利用した方も駅からシャトルバスなどで会場に向かうことも可能になるのではないか。
- ユニバーサルデザインについて、子育て世帯に向けた、おむつ交換台や授乳室、託児室などは必須であると感じている。ターゲットにしている世代が利用しなければ意味がないので、そのあたりの造り方などは、様々な人の意見を聞きながら造るべきと思う。
- 子ども達にスケート教室に行かせたとすれば、親としてはその姿を見届けたいところもあり、滑っている様子が見られるような多目的スペースや、下の子が小さい場合にはその子達が遊べる場所があるような複合的な施設が良い。送迎だけではなく、滑っている間にお茶が飲めるカフェや、運動できるようなスペースがある施設があれば良いと思う。
- ここ数年、県内でもリニューアルをした施設や新しく造った施設があるが、若い人たちの中で話題になるような仕掛け作りが必要である。行ってみたい、面白そうと会話上は出るが、実際に足を運ばないこともあると感じている。実際に行ってみて、自分の居場所になり、そこからリピートの的に行くようになってもらうので、ワクワクするような仕掛けも必要であると思う。

【山田 浩久 会長】

- 総じて、スケートだけではなく、スケート以外の施設も併設、併用して、スケート以外の利用者も呼び込む必要があるのではないかという御意見であった。
- さらには、カフェや子どもが遊べるような多目的スペースなどを設置してはどの御意見もあった。その魅力を高めるためには、スケート以外の施設を充実する方がよいという御意見もあり、あり方としては重要な指摘である。
- あらゆる面で多様化、多面化、多目的という部分が指摘されていたが、多目的な施設が必ずしもオールマイティな施設を示すものではない。目的が様々あり、何でもできる施設を造ってしまうと、逆にコンセプトが不明確になってしまい、ターゲットが定まらないことになる。多目的、多様化はあり方としては正しいのかもしれないが、それを踏まえて施設のコンセプトを明確に定めておくことが、あり方として正しいのではないか。
- 例えば、キーワードとして「優しい」、全ての人に優しく、県民全員にユニバーサルな提案ができるといった、一つの方向性を定めたいと、多目的、多様化という部分を詰めていくということが、一つのあり方ではないかと考える。

以 上